

市民と野党の共闘で政治を変えよう！

「市民連合@くしろ・ねむろ」結成のつどい



2020年1月19日、衆議院総選挙を目標に、北海道第7区に市民と立憲野党の統一候補を擁立することをめざす「市民連合@くしろ・ねむろ」が結成のつどいを釧路市内で開催し、釧根各地から200名以上の方が参加されました。

元道議の西田昭紘氏の他、根室の織田忠弘氏、中標津の瀬波秀人氏など7名の方が「呼びかけ人共同代表」となり、結成されました。

①立憲主義の回復と安保法制の廃止、②安倍政権下での憲法改正の阻止、③個人の尊厳と基本的人権の尊重という3点の基本理念を掲げ、市民と野党の共闘・協働を実現して、今後の各選挙で野党統一候補の当選を目指して活動することを目的としています。

呼びかけ人共同代表のあいさつとして宮田まどか氏は「くらし・雇用・平和や人権問題などに真摯に向き合う政治に変えていくため、みなさんの協力をお願いしたい」と述べていました。

また各政党からの連帯あいさつとして、立憲民主党から次期総選挙で道7区からの立候補を表明している篠田奈保子氏、日本共産党から2017年の衆議院選挙で7区の野党統一候補としてたつた石川明美氏の他、社民党、新社会党の各野党から、政治を変えるために野党共闘の実現することが必要と訴えられました。

講演する雨宮処凛さん（作家・活動家）



「市民連合@くしろ・ねむろ」結成のつどいの第2部では、作家・活動家の雨宮処凛氏が記念講演をおこないました。

雨宮氏は、相模原市の障がい者施設殺傷事件などヘイト（憎悪）が引き起こした近年の様々な事件を紹介しながら、「社会保障を持続するために命の選別がされる」、生産性が突き詰められる中で、そうでない人の排除が進んでいる日本の社会の歪みを指摘します。

また自身が中学生時代にいじめをうけた経験やフリーターの貧困生活、右翼に入って活動をしてきた経験を語りながら、「失われた20年」の中で貧困や格差が進み、頑張っても報われない時代に、このような事件や極端な主張に賛同する人々が増え、精神的にも貧困な社会となっていると、警鐘を鳴らしていました。

根室の子ども達は、本を読むのが好き？



根室市教育委員会では来年度から始まる「第2期 根室市子ども読書活動推進計画案」のパブリックコメントを、1月11日から募集しています。

市ではこれまで、7か月健診時に絵本の読みかせ体験会を行い、家庭でも読み聞かせを行って親子で本に親しむように絵本を2冊贈呈する「ブックスタート事業」を実施してきました。さらに継続して子ども達の読書習慣が根付くように小学1年生全員に児童書を贈る「セカンドブック事業」を行っています。

そして来年度から新たに、胎児に親が読み聞かせを行えるように（胎教？）母子手帳の申請時に絵本を進呈する「マタニティブック事業」をスタートさせる計画だそうです。

こうした新しい取り組みによって、子どもたちが生まれた時から周りに本のある環境を作ることになり、また親としても読み聞かせの練習をしながら出産・子育ての準備をすすめる良い機会となることを期待します。



根室市図書館のコーナー
市内の中高生達が手書きでおすすめ本を紹介している

子ども読書活動推進計画の策定のため市が実施したアンケートでは、3〜4歳児における読み聞かせを85%の家庭が実施し、また週1回以上読み聞かせを行う家庭が全体の8割以上を占めています。これは7年前のアンケートよりも向上しており、市の施策効果も一定程度表れているのではないかと思います。

ただしその一方で、一か月間に本を全く読まない「不読」は小学3年・5年生の約2割、中学・高校2年生では約3割にのぼるそうです。家で1日に読書する時間や一か月に読んだ本の冊数も、7年前より減少しています。

計画案では、読書をしない理由について「部活やスポーツが忙しい」「パソコン（インターネット）がしたい」「家にもあまり本がない」等と分析しています。

子ども達にとって、スマホ等で動画やマンガを観たりゲームをすることは、とても魅力的です。あれもこれもと忙しすぎて、じっくりと本を読む時間が取れないのかもしれない。それでも同じアンケートで「本が好き」「読書は大切」と根室の多くの子ども達が回答しているそうです。

文科省が2018年度に実施した調査では、「子どもが行きやすい場所に、本屋や図書館がある」、また「学校図書館がいつでも自由に利用しやすい環境にある」と、本を読む子どもの割合が高くなること示されています。

これからも根室の子ども達が、本に親しみやすい環境をつくることを、市行政や地域がしっかりと作っていく必要があることを、あらためて感じました。